

73期生のみなさん、こんにちは。国語科の江西です。

充実した日々を過ごしていますか？ 部活ができないので残念に思っている人も多いと思いますが、ここは気持ちを切り替えて、普段の春休みなら部活ばかりで宿題や弱点克服に十分な時間をかけられない人も、腰を据えてじっくりと自己の課題に対峙できると捉えて、この難局をプラスの力に変えましょう！

意欲的に課題に取り組んでいる人なら、もしかしたら、既にログレスを終えている人もいるかもしれませんね。3月1日(日)には解答のみを配付しましたが、現代語訳等を知りたい人もいると思います、ここに現代語訳を掲載します。解説書の内容は、著作権の問題もあり、掲載することができません。今回は古文1〜5を載せ、17日(火)に漢文1〜5を載せようと思います。

今回の一件により、春期講習も白紙になってしまいました。古文・漢文ともに約60名のみなさんが受講することになっていたのですが残念に思っています。また学校が再開してからフォローしたいと思いますが、少しかだけ古文のアドバイス。

・古文単語はできるだけ早くマスターする。夏休みを終えても「古文単語」を見ているのは遅いかも。

・文法はできるだけ春休み中に克服を。特に助動詞と敬語。助動詞をマスターするためには、動詞の活用の種類、助動詞の意味・接続活用を覚える必要があります。

・文章を読めるようになるためのポイントは、省略されている主語を見抜けるかどうかです。そのために、

①助詞「を・に・が・ど・ば」＋読点(、) で主語が変わることが多い

②使われている敬語の種類(尊敬?謙譲?敬語なし?等)に変化があるか

の二点を意識しましょう。まあ、②は偉い人が出てこないと思えませんが…。

・文章を読むトレーニングとしては、

①過去の「ログレス/グレートラーニング」の本文を2〜3回、何も見ずに読む(1回ではいけません！)

②そのあとに「解説書」の本文と横にある現代語訳を両方見ながら読む

③その際に、気になる文法事項もチェックする

④もう一度「問題集」の本文を読んで訳せるか試してみる

⑤訳や意味が分からない部分を「解説書」で確認

というのをたくさん文章(今までの問題集で50以上ある！)で行うのがよいと思います。英語でもそうですが、たくさん文章を読むと、頻出する表現や話の構造がある程度は見えてきます。単語や文法だけでなく、文章をたくさん読まないと強くなれませんよ。

…と、勉強の話ばかりでは面白くないので少し雑談を。僕は昨年大阪マラソンに当選して走って以来、膝を痛めていることを理由に遠ざかっていたマラソンに再チャレンジしています。そのトレーニングも兼ねて、生徒が誘ってくれた持久走の授業にも参加しました。最初は13分43秒でした(タイムはうる覚えです)。もちろん辛かったです。自分なりのベストを尽くしたつもりでした。次に走る際に、どうせなら前の記録よりも速く走りたいと思い、白石先生にアドバイスをいただきました。それは「最初の3周(つまり1km)をどれだけペースで入れるかが肝心だ」というものでした。前回とは異なる、自分でも「しんどい」と感じるペースで走りました。当然徐々にペースが落ちていきましたが、結果的に約36秒縮まり13分7秒でした。次は更なる欲が出てきます。ここまで来れば13分は切りたいと思います、山口先生にアドバイスをいただきました。それは「中盤でペースを上げる1周を作る」でした。僕は体力に自信がないので、6周目をその周にしました(4周目に頑張っ残り5周はきついでしよう?)。結果、更に10秒縮まり、12分57秒でした。それとは別に、先日走った木津川マラソンでは目標としていた4時間を切る事ができました。その時に、僕とほぼ同じペースで走る、「いやな強敵」(※僕が一方向的に嫌がっているだけです。「ライバル」と読んでも「とも」と読んでも構いません)

◎北斗の拳 がいきました。僕はランニングウォッチを見ながら一定のペースで走っています。彼女(年上のおばさんです)も僕とほぼ同じペースで走っています。ところが、彼女のペースが落ちてきたと思って追い抜くと、「スーッと」抜き返してきます。それが3回ありました(このへんがいややってん)。35kmくらいの給水所で僕が追い抜いて差をつけて以来、いつしか彼女のことを忘れていました。37〜38kmくらいで僕のペースが急に落ちました。限界が近かったのです。ただ、このペースだと4時間を切れそうなので満足でした。すると、あの強敵がまた「スーッと」抜いて行ったのです。もう限界だと思っていた僕の心が燃え始めました。絶対に負けられへん。一計を案じた僕は、もう追い抜くことをやめ、42kmまで静かに後ろを追走しました。そして、残り200mで全力ダッシュをして強敵をぶつちぎってさしあげました。道中は迷惑でしたが、彼女のお陰でタイムが2分くらい縮まったのは間違いありません。これらから得た教訓は、①自分で全力を出しているつもりでも、出し切っていない、②アドバイスは素直に聞いたほうが良い、③自分で限界を決めてはいけない、の三つです。一人で頑張っていると、視野が狭くなり、場合によっては効率が悪くなることもあるでしょう。「前向きに気持ちを切り替えられる何か」は多いほうが良いと思います。その一つが我々や高津高校であればいいのですが。

さて、家で退屈に過かしている人も多いと思います。僕の好きなテレビ番組を紹介するので機会があれば観てください。①Eテレ「デザインあ」(土曜7:00~7:15) ②Eテレ「びじゅチューン」(水曜19:50~19:55) ③Eテレ「2355」(月~金23:55~24:00) ④Eテレ/BSプレミアム「美の壺」(日曜23:00~23:30等)。お分かりの通り、僕はEテレ好きです。①は身の回りの「デザイン」に関するものを思いもよらない角度で切り取って見せてくれる、知的好奇心をくすぐってくれる良い番組です。②は、奇才井上涼がある美術作品を2分ほどの歌付きのアニメーションにする、という番組です。録画をして3回観ることをお勧めします。きつと病みつきになるはず。③は寝る前に癒されます。④は①とコンセプトは似ていて、美の鑑賞ポイントが楽しく学べます。

園の別当入道は、比類のない料理人である。ある人の所で、すばらしい鯉を出したので、(その場に居合わせた)人は皆、別当入道の料理の技術を見たいと思うが、軽々しく言い出すようなのもどうかと、ためらっていたところ、別当入道はそのような(機転のきく)人で、「このところ、百日の鯉を切っておりますので(〓百日間、鯉の料理を続けておりますので)、今日(も)欠かすわけにはいきません。ぜひとも願ってお引き受けしましょう」と言ってお切りになったのを、たいそうその場に似つかわしく、興趣のあることと、人々が思っていたと、ある人が、北山の太政入道殿にお話し申し上げなされたところ、「このようなことは、私はわざとらしく(嫌味に)思われるのである。『切るのに適当な人がいないならば、(私に)ください。切りましょう』と言ったとしたら、いっそうよいだろう。どうして百日の鯉を切ることがあろうか(いや、そんなことはしない)とおっしゃったのは、面白いと思われたと、(その)人がお話しになったのは、たいそう面白い。だいたい、趣向を凝らして面白みがあるのよりも、面白みがなくても穏当なのがまさっているものである。客のもてなしなども、ちょうど折よくといったように取り繕ったのも、本当によいけれど、ただそれとなく持ち出したのが、じつによい。人に物を与えた場合も、何のきっかけもなく、「これを、差し上げよう」と言ったのが、本当の心持ちである。惜しむそぶりをして(先方から)所望されようと思ったり、勝負事に負けたときの賭け物にかこつけたりなどしたのは、不快である。

西行法師が出家したとき、(出家した)後のことを、弟であった男に託していったのだが、幼い娘で特別にかわいがっていたのを、そうはいってもやはり見捨てにくく、どのようにしようと思うけれども、安心して預けられるはずの人も(他には)思い浮かばなかったので、やはりこの弟の子として、かわいがって育てねばならないということ、(弟に)丁寧言い置いたそう。このようにして、あちこち修行して回るうちに、あつけなく二、三年が過ぎてしまった。所用のついでがあつて、京の方へ回ってきた折に、(自分が俗人であつた)あの頃の弟の家を通り過ぎたときに、ふと思ひ出して、それにしても、あの子は五つくらいになつたであろう。どのように成長しただろうかと(西行は)気がかりに思われて、こうとは言わないけれど、門のそばで中をのぞき込んだちよūdそのとき、この娘がひどく粗末なひとえ物を着た姿で、自分の低い者の子どもたちと混じつて、土の上に座つて立膝のそばで遊んでいる。髪は豊かに肩のあたりまでかかつて、容貌もすぐれ、将来が楽しみである様子であるのを、(西行は)「その子(が我が娘)だよ」と見ると、急に胸がいっぱいになつて、(その姿が)ひどく残念だと見て立っているうちに、その子が自分の方を見てよこして、「さああつちへいきましよう、(あそこに)お坊さんがいるのが、おそろしいので」と言つて家の中に入つてしまった。(西行は)この事を、考えまいと思うけれど、そうはいつてもやはり気に掛かつて月日が経つうちに、あるいはこのような事を聞いてお知りになつたのであろうか、九条の民部卿の御娘で、冷泉殿と申し上げた方が、(娘の)母(〓西行の妻)に縁があつて、「我が子にして、かわいがつて育てよう」と、丁寧におっしゃつたので、(母は)「人柄も賤しくなく、たいそう良いこと」と言つて急いで(娘を)渡した。

(前話と) 同じ源義家が、十二年の合戦(≡前九年の役)の後で、宇治殿(≡藤原頼通)の所へ参上して、(その)合戦の経過を話し申し上げたのを、大江匡房卿がじっくり聞いて、「(義家は)才能は優れた武士であるが、やはり兵法を知らない」と独り言をおっしゃったのを、義家の家来が聞きつけて、「異様なことをおっしゃる人だなあ」と思ったそうだ。そうするうちに、大江匡房卿が出て行かれたので、すぐに義家も出て行ったが、家来は、「(匡房卿が)このような事をおっしゃった」と語ったので、(義家は)「きつと(何か)理由があるのだろう」と言って、(匡房卿が)車にお乗りになった所に進み寄って会って挨拶なさった。そのまま(義家は匡房卿の)弟子になって、それ以降はいつも(匡房卿の所へ)参上して、兵法を学ばれた。その後、永保の合戦(≡後三年の役)の時、(義家が)金沢の城を攻めた際に、列をなした雁の一群が飛来して、稲を刈り取った後の田の上に降りようとしたが、突然(何かに)驚いて、列を乱して飛び去ったのを、將軍(≡義家)は不審に思つて馬の口輪をひかえて(警戒し)、「以前に匡房卿がお教えになった事があり、『そもそも軍兵が、野原に隠れ伏している時は、飛ぶ雁は列を乱す』、この野原には必ず敵兵が隠れ伏しているに違いない、敵の背後をつく軍勢を回せ」ということを命令なさるので、味方の兵を分けて(敵の背後の)三方を取り巻いた時、思つた通り(敵は)三百余騎(の兵)を隠しておいていたのだつた。(それから)両軍入り乱れて激戦となつた。けれども、前から(敵の動きを)察知していた事なので、將軍の軍が勝利を収めて(清原)武衡たちの軍勢は敗れた。(義家は)「匡房卿の(教えの)一言がもしなかったら、危なかつただろうに」とおっしゃつた。

「(夢の中で鯉に変身した興義は)急に腹が減つて食べ物欲しくなる有様なので、あちこちで探し求めて手に入れられないまま無我夢中になつていくうちに、突然文四が釣り糸を垂れるのに出くわす。その餌は非常に香りがよい。(一方)心はまた河の神の戒めを守つて(こう)思う。私は仏のお弟子である。少しの間食物を手に入れることができないとしても、どうしていやしく魚の餌を飲もうか(いや、飲まない)と思つてそこを去る。しばらくして飢えがますます甚だしいので、さらに考えると、こうなつては我慢できない。たとえこの餌を飲んでも馬鹿みたいに捕らえられるだろうか(いや、捕らえられない)。以前から彼は知人であるから、どんな遠慮があるうか(いや、ないだろう)と思つてとうとう餌を飲む。文四は素早く糸を繰り上げて私を捕らえる。『これは何をするのか』と(私≡興義は)叫んだけれども、彼はまったく聞こえない風に振る舞つて縄を使つて私のエラを差し通し、葦の間に船をつなぎ、私を籠に押し込んで、殿(≡兵之助殿)の門へ進んで入る。殿は弟君と南向きの部屋で碁を打つて遊んでいらつしやる。掃除役人が、側に控えて菓子を食べている。文四が持つて来た大魚を見て人々はたいそう感嘆なさる。私は、その時人々に向かつて、声を張り上げて、『皆様方は興義をお忘れなのか。許してください。寺に帰してください』としきりに叫んだけれど人々は知らぬ風に振る舞つてただ手を打つてお喜びになる。調理人である者が、最初に私の両目を左手の指で強くつかみ、右手に研ぎ澄ました刀を取つて俎板に引き上げまさに切ろうとした時、私が苦しみの余りに大声をあげて、『仏弟子を殺害するなんて話があるか(いや、ない)。私を助けてくれ、私を助けてくれ』と泣き叫んだけれども、(調理人は)聞き入れない。ついに切られると思われて夢が覚めた」と(興義は)語る。人々はひどく感嘆し不思議がつて、「師(≡興義)の話に沿つて思い出すと、(師の言う)その度ごとに魚の口の動くのを見たが、まったく声を出すことがない、こんな事実を目の前で見たことはいそふ不思議だ」と言って、従者を家に走らせて残っている鱸を湖に捨てさせたそうだ。

あの葛城の神が夜に岩の橋を架けようと言った約束が途中で絶えたように、（あなたが明るくなくても帰らないのなら）夜に交わした愛情もきつと絶えるでしょう。夜が明けることがつらい葛城の神（と同様に醜い私も顔を見られたくないのです）。

この歌は、（次の話を踏まえている。）葛城山と、吉野山との谷あいの、遙かに離れた間をめぐり歩くと、いろいろと苦労があるので、役の行者といった修験者が、この葛城山の峰から、あの吉野山の峰に、橋を架けたならば、何の苦労もなく、人はきつと通うだろうと思って、その山にいらっしやる一言主と申し上げる神に、祈り申し上げたことは、「神の神通力は、仏に劣ることはない。（我々）普通の人間が、できないことをするのを、神通力と言っている。乞い願わくば、この葛城山の頂上から、あの吉野山の頂上まで、岩を用いて、橋を架けてください。この祈願を、ありがたくもお受けくださるならば、負担に応じて、法文をお唱え申し上げよう」と申し上げたところ、空から声が聞こえてきて、「私はこのことを引き受けた。必ず（橋を）架けよう。ただし、私の容貌は醜いので、（昼間に橋を架けると）見る人が、恐れ怖がる。夜ごとに（橋を）架けよう」とおっしゃった。（役の行者はさらに）「望むことは、早く（橋を）お架けください」と申し上げて、般若心経を読んで（完成を）祈り申し上げたが、（一言主は）その夜のうちに（橋を）少し架けて、昼は架けない（で、やめてしまった）。役の行者はそれを見て、たいそう怒って、「それならば、護法の鬼神よこの神をお縛りください」と申し上げる。（すると）護法の鬼神がすぐに、葛のつるで、一言主の神を縛った。その（縛られた）神は、大きな岩として見えなさるので、葛が絡みついて、掛け袋などに、物を入れているように、隙間も窪みもなく、絡みついて、今も（葛城山に）いらっしやるそうだ。